

大学での留学経験がキャリア成熟に及ぼす影響要因に関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1313051 野口 早紀

1. 研究動機・研究目的

職業選択や就職の問題は、現代の大学生にとって、看過することのできない重要課題の一つである。大学生はあらゆる分野の職業について探索的に選択する時期にあり、彼らはその選択を通じ、職業的自己概念を発達させていく。発達につれて個人が到達したレベルを示す概念がキャリア成熟である(寺田, 2015)。ここで述べるキャリア成熟とは、「キャリア選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢」のことである(坂柳, 1996)。

矢崎ら(2007)は、大学生を対象に、卒後の進路の決定/未決定や就職活動の満足度に寄与している要因は、企業情報の収集や就職ガイダンスへの出席ではなく、実際に卒業生とコンタクトを取ることやインターンシップに参加するなど、より積極的な活動を行うことであるということを示した。

一方、文部科学省は2005年から国際交流促進に向けた施策の動向と展開として、留学生交流の推進を挙げている。若い世代である学生たちにとって異文化を体験することは、価値観の再認識、文化的同一性の発見、自他意識の高揚、心理的自立が確立される転換期と言えるであろう。また、この時期におけるものの見方の変化や新鮮な感動は、将来の方向性を決める大きなきっかけにもなり得る(川内, 2006)。留学経験に関する研究では、留学前後における自己効力感や自尊感情、問題解決能力の変化についてのものが主である。しかし、留学を経験した上で卒後の進路や自己の将来を具体的にどう考えたかに関する研究や、内面の変化がその後の職業選択に及ぼす影響など、とりわけキャリア成熟に基づく研究はほとんど見当たらないため、研究蓄積が必要であると考えられる。そこで本研究では、大学在学中に短期または長期の留学を経験した大学4年生を対象に、彼らのキャリア成熟に影響を及ぼしている要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【調査対象】

短期または長期留学を経験し、卒後の進路が決定している大学4年生

(男性4名、女性4名)

【調査期間】

2016年10月～11月

【調査方法】

- ・フェイスシート
- ・インタビュー調査(半構造化インタビュー)

3. 主な結果と考察

留学がキャリア成熟に与える影響の種類を大きく3つのカテゴリーに分類することができた。1つ目は【将来に対する影響】であり、これは、留学経験のおかげで自身の将来に対

するビジョンやこれから取るべき行動が明確になったとの結果や、将来像が明確にはなっていないものの、これからのキャリアや将来を考えるためのトリガーであったり、将来の方向性を考えるヒントとして留学を捉える結果となった。

2つ目は【就職への直接的な活用】であり、滞在中の出来事をまとめ、就職活動において自身の強みやPRに活かした例や、留学中に習得した語学力を直接仕事に活かすことを目的とすることなどを含むカテゴリーである。

最も多くの回答を得られたのが3つ目の【内面の進化・改善】である。これは、使命感やチャレンジ精神の芽生えなど自己に対するポジティブな感情が生まれたことや、主張や発言に対する意識の変化が生じたことなどから成立している。さらに、比較的怠慢になりがちなこれまでの姿勢を見直した学生が多く、学習や物事に対する取り組み姿勢の変化や改善なども結果として挙げられる。

また、上記した3つのカテゴリー以外にも、留学を経験したことにより海外についての新たな発見や広い視野を養えただけでなく、人とのつながりの大切さや母国の良さに対する気づきなど、多方面でのポジティブな影響をもたらす結果となったことも特筆すべきことである。

4. 結論

本研究において以下のことが示唆された。

1. 留学は、その期間や時期よりも、明確な目的や留学先での経験値が、その後のキャリア成熟と深く関連していることが示唆された。
2. 留学経験は、海外についての新たな発見や広い視野を養うだけでなく、人とのつながりの大切さや母国の良さに対する気づきなど、多方面でのポジティブな影響をもたらす。
3. 本研究での各インタビュー対象者は、留学の目的を語学習得としているが、それだけに留まらず、キャリア成熟における様々な“学び”を留学により体得したと捉えられる結果となった。
4. 留学経験は、キャリア成熟の3つの因子（関心性・自律性・計画性）において、様々な影響を及ぼすことが明らかとなった。なかでも、自己の内面を改め、変化や改善を促すキャリア自律性への影響が多く見られた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文を執筆するにあたり、インタビューに応じていただいた学生の皆様、初対面にも関わらず快く応じていただいたお陰で、無事執筆することができました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

また、この研究をより質の高いものになるよう温かく丁寧なご指導をいただいたゼミの担当教諭である水野基樹先生、さらには、テーマ設定から研究方法、論文の書き方など長きに渡り懇切丁寧にご指導やご助言を下さいました大学院生の方々に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

本論文を完成できたのは、多くの方々のご指導やお力添えを賜ったからだ実感しております。論文の執筆にご協力いただいた全ての方々に改めて感謝の意を表し、終わりの言葉とさせていただきます。